護蹄管理の考え方と実践

デーリィ・ジャパン 11 月号寄稿文　阿部紀次

7月17日、オランダ職業訓練学校(PTC+)の削蹄部門主任ピーター・クルースターマン先生を迎えて講習を行いましたので、その時の情報を基に述べます。

護蹄管理の基本であり主体は以下の 4 点です(★☆◎◆に順序・優劣はない)。

★よく設計された(護蹄を考慮した)飼料が与えられていること。

☆良い牛舎環境:寝心地よいベッドがセットされていることや、特に足元の環境(感染源、床面の状況)が悪すぎないこと。

◎計画的な蹄浴:蹄浴槽の長さは最小 3m。頻度は群の状況次第で週1～3 回。
薬液は硫酸銅 3-5%(欧州はホルマリンが主流)(日本では消石灰 20kg/水 80ℓが流行)。

◆計画的な削蹄:頻度は蹄の伸び方および症状次第で年1～3 回行う。

護蹄管理を進めるには、上記 4 点を同時に考慮する必要があるのです。しかし我国で不十分と思われるのは、「◎計画的な蹄浴」ではないでしょうか。幸い デーリィ・ジャパン誌 1 月号で鳥取家保森下獣医師の記事(消石灰の蹄浴)が発表されてから、当地でも蹄浴が徐々に根付き始めた感があります。欧州では主流でも、わが国ではその刺激性から敬遠されるホルマリンと、環境への配慮からやはり消極的になる銅剤に比較して、消石灰は安全で安価と言えるでしょう(効果についての情報は未だ少ないが)。では、それを日常行う(特に大型酪農場で)としたら、蹄浴槽の管理が楽に行えるハードが必要です。そこで我々は、「造りつけの蹄浴槽」を設計・設置してみましたのでご紹介します。写真1,2 は別海町の 350 頭搾乳農場の帰り通路(左右パーラー出口から 3m 地点)に設置した蹄浴槽です。外寸で、横 1.8m 長さ 3.3m、高さ(手前 13cm、向う 20cm)です。2mm 厚のステンレスの外壁に 10cm 角の防腐柱(2 段重ね)で内枠を取り、底にはツーバイフォー材を敷き詰めました。向こう面には直径 15cm の排水口(ゴム栓)を 3 個付けました。また、馴致に 5 日間かけ、粉から徐々に液体に馴らしました。現在この農場では写真 3 のように、日常の仕事として蹄浴を取り入れることが出来て満足されています。

さて、話を戻すと、4 点の護蹄管理技術についてその任に当たるのは、酪農家・牛舎の設計施工業者・栄養士・削蹄師・獣医師となります。しかし、現状では削蹄師に一任されているように感じます。なぜなら、異常蹄や跛行(はこう:歩行異常)の多くを実際に処置するのは削蹄師であり、同農場の過去の状態や他農場の状況など、たくさんの説得力ある情報を持っているからです。確かに現状把握するため削蹄師の情報は貴重です。そして、ほんの数年前まで農場の護蹄管理は削蹄師まかせで十分でした。しかし、削蹄を必要とする牛の数が増加している現在、削蹄師の数は不足しており、削蹄師は削蹄をするだけで大忙しです。また、蹄病も多岐にわたるため、群における病状把握のためには獣医学的知識と、場合によっては鎮痛・消炎剤や抗生物質など要指示薬が必要なこともあります。また、麻酔が必要な外科的処置や、継続的な治療が必要な症例もありますし、ケトージスなどを併発して補液が必要とされる症例もあります。更には、栄養の知識や牛舎構造も含めて総合的に対処される必要もあります。従って、獣医師も普段からもっとこの領域に積極的に参画すべきです。

その意味で獣医師の立場から農場へ一言言わせて頂きたいのは、『農場に枠場があって欲しい』ことです。もちろん症例数の少ない農場にはわざわざ必要ありません。何かで代用することや、鎮静剤＆麻酔薬を応用して治療することは可能です。しかし、症例が多くなっ

てきている現状では、農場として「削蹄師と獣医師の使い分け」も考慮される時期が来ていると思います。一方で、農場の中で早期治療を行っている方も増えているようです。農場に削蹄枠場があれば、自分たちで早期治療が行えますし、獣医師も治療を行えます。逆に獣医師に対しても一言加えるなら、「枠場が無いから出来ません」では通用しませんし、やるならやるで積極的に楽しく、そしてしっかり治さなければ次の症例は来ません。もちろん護蹄管理の輪の中にいつまでたっても入れないでしょう。となれば、護蹄管理は先へ進めないのです。

他方、削蹄師は削蹄後に跛行させてはいけません。削蹄技術だけで解決されない飼料や施設や遺伝などの問題も、そこは考慮に入れつつ個体の削蹄に技術を注ぐことが求められています。しかしながら削蹄後の跛行の原因として最も多いのは「過削:かさく」です。特にコンクリート床で生活する牛には適度な蹄底の厚みが必要なのにも関わらず、油圧枠場とグラインダーを使う削蹄方法では、「目の前のものをついつい削ってしまう」傾向もありますし、農家のためを思って「次の削蹄まで持たせるために短目に切る」こともあります。また、「短目に切ることを農家が望んでいる」場合も多いのではないでしょうか。しかし、その考えが数頭の明らかな過削事故と、全体的な足の痛みにつながっている危険性があります。特に、全体的に過剰成長してしまった蹄を1回の削蹄で短く格好良く整えるのは危険です。この場合農家側がそう望むことが多いようです。過度の矯正は危険ですので、もっと早めに頼まなくてはいけません（頼んでもなかなか来ない削蹄師は問題です）。また、作業スピードについても、猛烈に速くて殺気立っているように感じる削蹄現場に出くわすことがあります。牛の取り回しが元々荒いチームもありますが、農場側から「とにかく早く終わらせて欲しい」といった間違ったプレッシャーをかけていることもあるようです。

農場から削蹄師さんへのメッセージは、「今のこの農場の状況を考え・牛に合わせながら淡々と正確に、そして最終的に削蹄後に跛行させないように頑張って行って下さい。」ということではないでしょうか。また、局面的にはお金の話になるかもしれません。例えば、1 頭（1 回）あたりの金額を抑えて、もっと頻繁に行うことも一つの方法です。また、全頭一斉削蹄ではなくて、乾乳前期牛を中心に 45 日間隔で行う計画も実行されている例があります。また筆者は、蹄病多発農場で全頭削蹄時に病蹄を処置しまくる作戦を実行しています。

もちろん牛の蹄に関して何事もない事が上手く行っている状態と言えますが、そのためには、普段から農場側と削蹄師、獣医師が護蹄管理の立場で牛をまもるために紳士的にしっかり会話することが最も大切でしょう。その目的での研究会は意味があると思います。

最後に、本稿では許される範囲に止めたつもりですが、ピーター・クルースターマン先生の威も借りて随分生意気なことを述べました。もしもお気を害されましたらそれは私の本意ではありません。それから、オランダ PTC+の削蹄コースは、他と比較して「将来ブレない技術とそのための心構え」を得るために、非常に良いコースだと思います。ぜひ多くの有志が参加されることを望みます。今回講義の後、先生と知床旅行をご一緒しました。そこで、氏（師）は「感激的に謙虚で紳士的」であったことを申し添えておきます。

写真 1

蹄浴槽をパーラー出口から見た図。

手前は勾配の上方になるため、壁を低くしてある。

[容量は約 400 リットル]

写真 2

蹄浴槽を下から見た図。

直径 15cm の大きな排水口が 3 つある。

写真 3

消石灰を用いて蹄浴中。

水 400 リットルに対して石灰の量は：

当初 20kg 5 袋で行った。

趾端の皮膚が炎症（石灰焼け）したので、石灰の量を減らしたり、水だけにしたり、硫酸銅の日を設けたりしている。

現在は 2 袋で行っている。

2009 年 7 月 17 日

根釧農試にて、根室獣医師会＆根室護蹄研究会主催で行われた講習会の一コマ。ピーター・クルースターマン先生は大きな方でした。

ご質問お問い合わせは　阿部紀次まで

（携帯電話）080-5589-0195

（E メール）abenori@aurens.or.jp

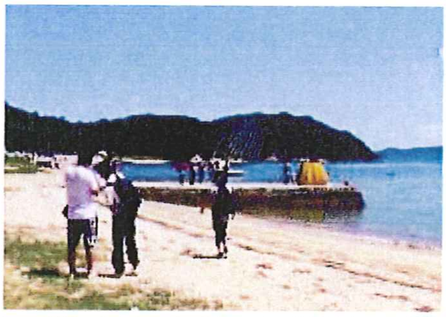
※　協力：（鉄工所）ライフワーク

※　参考：（ブログ）http://ameblo.jp/abenorinori

直島でびっくり

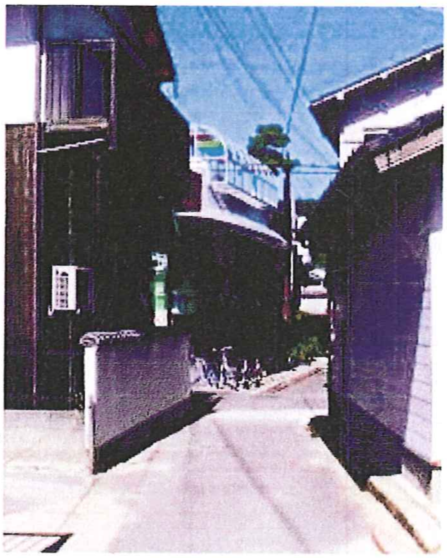
阿部紀次

へそくりくんのブログより



今年の夏、下関の実家に帰省し、戻り道に四国を巡った後、8月14日、直島(香川県なおしま)を訪れました。

8月16日の「がっちりマンデー」で、『島ビジネスでガッチリ！』などとやっていた所です。直島は瀬戸内海に浮かぶ面積8平方キロメートル、人口 3,500 人の島です。1986 年に当時の町長さんと福武書店(現ベネッセ)前社長さんが協議して、「世界中の子供たちが集まることができる場をつくる」ことを目的にプロジェクトが始まったとの事。以後、建築家の安藤忠雄氏を含め、世界中から現代アートの気鋭達が「直島に即したアート」をいたるところに配置しています(上写真は何気なく堤防にある、草間彌生作の「南瓜」)。その日も島に渡るためのフェリーから、いかにも芸術を専攻しているような若者や、外国人がぞろぞろ降りてきました。

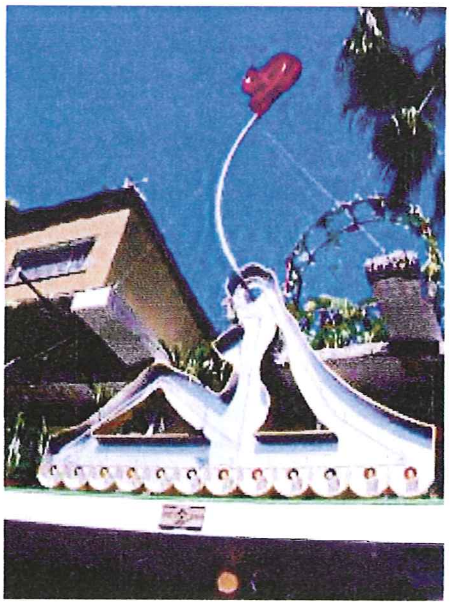


この島、元々は特徴のない過疎の島で、民家の多くが廃墟然としていたそうですが、1997 年から始まった「家プロジェクト」では、「廃墟・空き家を芸術家に任せてみた」ということです。そうしたら、既存の住民たち(特に高齢者)が町の美観に目覚め、このプロジェクトを後押しするように活動するようになったそうです。

「がっちりマンデー」でも、あるだんなさんは、「わしは、現代アートはよう分からんが、若い娘がいっぱい来るから良い。」と話していました。実際に現地でも、各展示場にはお年を召された方が案内係をしておられました。そして、質問にもパキッと答えてくれるのです。作品以外の民家にも凝ったのれんや表札が掛かり、町が整然としていながら活気があるように見受けられました。

上写真、何気ない路地ですが、
ちょっと向こうに変わった建物があります。

そこに、観光客がぞろぞろいて、写真を撮っている人もいます。皆の目当ては、2週間前にオープン仕立ての、大竹伸朗氏プロデュースの「直島銭湯」 本当のお風呂屋さん(入浴料一般 500 円、島民 300 円)です。



大竹伸朗さん独特の「スクラップアート(廃物を上手いこと利用してアートにしてしまう)」の、一種異様ではありますが いかにも明るく楽しげな感じです。正面には、どこかに捨ててあったラブホテルの看板が掲げられていて思わず笑ってしまいます。

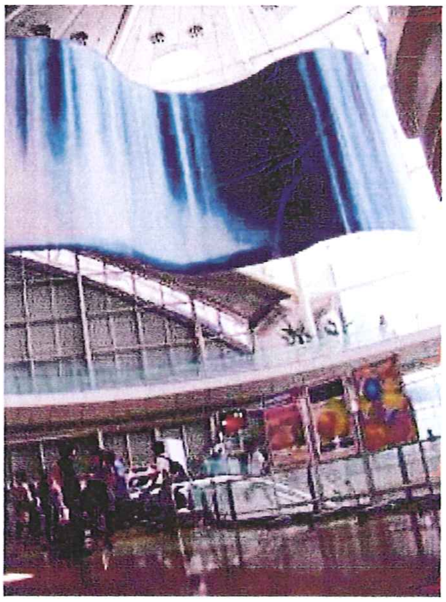
この直島銭湯に入って ひょいと左を見てびっくり！

「べつかいの牛乳屋さん」が置いてあったのです！！

そしてケースの上には、
「べつかい牛乳　150 円
大竹氏が働いていた北海道別海町の牛乳
Milk from Betsukai where Mr. Ohtake was working.」　のポップもありました。

大竹伸朗氏は、今日本で最も人を呼べる現代アーティストと言われています。
その氏が、別海町のウルリー牧場で１年間働いていたことを「原点」として大切にしてくれていることを、正に実感させて頂きました。

風呂上りに腰に手を当ててグッと牛乳を飲み干す快感を、直島銭湯で、別海牛乳で味わうことができ、不思議でもあり嬉しくもあり、とにかく幸せな気分になりました。



最後にもう一つ。

この写真は、翌日　羽田空港のロビーで見た巨大オブジェです。
これが「千住博氏の『ウォーターフォールズ』の作風であること」など、今までの私には分かるはずもないことですが、直島の石橋で見たからこそハッと気付いて、「これは滝でもあり、オーローラもイメージできるなぁ」など、より興味深く感じることができました。

ちなみに、千住博氏のこの作風のものが釧路芸術館にもあるとのこと、今度行って見たいと思います。

参考：　・新潮社「直島　瀬戸内アートの楽園」
・千住博公式 HP

・へそくりくんのブログ
http://ameblo.jp/abenorinori